

# 創作オペレッタにおける音楽作りとドラマ性

## —言語表現と非言語表現の融合—

北村 恵子

Kitamura Keiko

### 要 旨

創作オペレッタの活動は、言語表現と非言語表現の融合された総合活動である。それは、劇活動としての意味と人間教育としての意味ももっている。学生への調査によれば、創作オペレッタを構成する諸要素のうち、一番印象に残るのがストーリーで、次いで音楽が拮抗する結果であったが、創作オペレッタはストーリーのドラマ性と音楽性が総合されて表現されるため、それぞれの境界はつけ難いが、音楽作りにおいてはドラマ性に影響を受けるという必然に支配されることが多い。今論文は、看護専門学校での「音楽」授業から、音楽作りとドラマ性との関係について述べたものである。

キーワード：創作オペレッタ・音楽作り・ドラマ性

### I. はじめに

創作オペレッタの活動は、音楽を伴う劇形態の音楽活動であり、さまざまなジャンルの要素が複雑に機能しあう総合活動として位置づけられている。それはまた、言語表現と非言語表現の融合された総合活動でもある。

また、創作オペレッタは劇形態をとるため、「虚構」のなかでさまざまな思いや感情の体験ができ、感性やイメージを豊かにして心を動かし行動する必然がそこに生ずる。さらに、そこに流れるドラマ性の影響によって、自分がその場を生きている状況を体感し、それによってその場の状況に即した音楽や表現が出現してくるものと考えられる。

今論文は、この総合的な活動のなかから特に音楽作りに焦点をあて、創作オペレッタのドラマ性と音楽作りの必然について述べるものである。

## II. 創作オペレッタの言語表現と非言語表現

### 1. 言語表現と非言語表現の融合

創作オペレッタの活動は、言語表現と非言語表現が融合された総合活動として考えることができる。

一般的に表現といった場合、主に言語を用いてお互いのコミュニケーションを図るための「言語表現」と、コトバという記号媒体に因らない「非言語表現」の二つの方向がある。

西澤昭男は「言語では表現できない感情、観念、感覚、思想など、“筆舌に尽くしがたい”心情を表すには、非言語表現が適していると述べているが(注1)、創作オペレッタのような劇活動は台詞や詞、言葉のついた音楽などの言語性によるストーリー進行と、踊りや動き、表情などを含む所作のほか、言葉のつかない音楽、美術を始め、舞台構成に関するあらゆるジャンルの非言語芸術の総合により表現されるものである。また、西澤は音楽や美術、舞踊や演劇などのさまざまな表現様式に共通する非言語表現の因子として、①流れ ②動き ③広がり の3点をあげている(前掲書)。「流れ」は事象が相互に浸透しあう持続のメタファー(暗喩)としてあらゆる非言語表現を支える基盤となり、「動き」はその身体的関連とともに、心理的ダイナミズムを産み出す原動力として欠くことのできない要素であり、「広がり」は未来への志向性において、変容と発展への無限の可能性を暗示しているというのである。

そう考えると、創作オペレッタの活動は、この非言語表現因子の流れ・動き・広がり の3点が言語表現と融合することによって、教育活動としての意味をもつということができる。

### 2. 人間教育としての創作オペレッタ

創作オペレッタ活動は、音楽やそのほかの総合的な技術を学ぶだけではなく、言語表現と非言語表現の融合を目指した教育活動としてとりあげる意味がある。その目的には、とかくコトバ優先の社会がもつある種の概念の決めつけともいえる教育構造に対して、言語表現に加えて非言語表現のもつ豊かさを是非体験的に学んで欲しいことがあげられる。すなわち、言語を超えた地平でものを考えたり感じたりすることの意味や、言語のなかに新しい感覚を呼び込む非言語表現の世界を、教育活動のなかでの経験をとおして感じとって欲しいからである。そして、それが豊かな表現となって日常生活のなかに積みあげられることを願っているからである。

さらに、創作オペレッタは人間教育を目指した教育活動としての効果も認められる。それは、過去の長い間の筆者の経験からも実証することができる(注2)。

さて、人間教育のなかでも特に感性や表現力は生きるために欠かせない大切なものである。しかし、それは教えて分らせるというものではなく、育むことによって生まれてくるため、その教育方法には工夫が求められている。

その点、劇活動はそれに適しているものといえよう。

### 3. 劇活動としての創作オペレッタ

創作オペレッタは劇形態をとる音楽活動であるため、劇と音楽の両面からの要素が融合された形で展開され、前述した言語表現と非言語表現の融合により、両面が複雑に機能しあう場がそこに生まれ出るため、技術的なことだけでなく、人間教育としての豊かさを実感できるものと考えられる。

劇活動は「虚構」のなかでさまざまな思いや感情を体験でき、感性やイメージを豊かにして心を動かし行動する必然がそこに生じる。何かに向かいあうことで生まれる感性や感受性を育てる場がそこにあれば、表現の必要性も増大し、表現力や表現技術が育成され、健全な心身の育成も可能となるだろう。

### Ⅲ. 創作オペレッタのドラマ性・音楽性・総合性

筆者がまとめた「創作オペレッタの構成要素に関する研究そのⅠ」は(注3)、学生が創作したオペレッタをとりあげ、それを構成する主要素について短期大学の幼児教育学科学生への意識調査を行い、各要素の受容に関する内容を明らかにしたものであった。その結果、創作オペレッタを構成する要素のうち一番印象に残るのがストーリーで、その作品を決定づける第一要素であること、第二位の音楽の存在もストーリーと拮抗する要素であることが分かった。

ストーリーの面では、送り手の意図するテーマを対象の観客に伝えるためには、テーマや内容の適切さと、ストーリーのドラマ性、すなわち、展開方法が重要な鍵を握るという結論であった。しかし、第二位の音楽を始め、舞台を進展させる他の多くの要素との融合によって完成するものだけに、それぞれを分離して検討を加えることには無理があることも付言しておく必要がある。さらに、この受容感覚の調査対象にあたる作品がほかの作品であった場合は、違った結論が出るだろうことも予想される。

創作オペレッタを構成する要素には、ストーリーや音楽のほかにも、送り手と受け手との関係を意識した演技、照明、音響、舞台装置、衣装やメーキャップ、それに舞台構成についてのさまざまなものなどがあげられる。なかでもストーリーと音楽は特に重要である。しかし、前述したように両者を切り離して論ずることは難しい。すなわち、歌詞によって物語の筋が進み、メロディーの音調がその場の雰囲気や情景を表現し、また、登場人物や物そのものを音や音楽で推測させることもある。これらは、音楽がノン・バーバルコミュニケーションである証しである。そして、まさにこれは言語表現と非言語表現との融合による場の醸成といえ、それぞれの境界はつけ難いのは至極当然なことであろう。

ともあれ、創作オペレッタにおける音楽の存在は、ストーリーをドラマチックに展開させるためには無くてはならぬものとして機能し、時にはストーリーそのものを進展させ、時には場面ごとの雰囲気を盛りあげ、演技と一体化して観客にアピールし、時には得もいわれぬ感情を醸成し、観客の心情を突き動かす力をもっている。

もとより、音楽を伴う劇形態をとるオペレッタのような場合、ストーリーと音楽を切り離し

て論ずることはあまり意味がないかもしれないが、オペラが誕生した頃から、そのどちらが優先か論争の的になっていたというのも頷けるほど、順位をつけるのは難しいことである。

例えば、1999年9月30日の信濃毎日新聞に掲載された片桐卓也の「オペラにはどんな未来が」によれば、同年9月に松本市で開催されたサイトウ・キネン・フェスティバルでのオペラ“ファーストの劫罰”は「映像を大胆に活用しつつ、ダンスやアクロバットも取り入れる手法だった」ことに触れ、音楽とドラマの融合の難しさについて「オペラは17世紀初頭のフィレンツェで誕生したが、その時から既に音楽だけでなく文学・美術・建築などのさまざまなジャンルの芸術家が協力する一種のマルチメディアだった。だから、20世紀のメディアである映像をそこにとり込んでいくのは自然な流れだ。同時に、オペラとは音楽であり歌であるという考えも始まりから根強い。オペラにおける歴史的論争は、歌・音楽の面白さか、ドラマ性・演劇性が優位かという対立点を巡り永遠に繰り返されるといってもよい」と述べている。さらに、ドイツの作曲家ワーグナーについて「彼が〈楽劇〉という概念を使って音楽・歌とドラマ性を融合しようとしたのは、その永遠の課題への彼なりの回答だ」と述べ、現在でもこの課題が残っていることに触れ、過去のオペラでも現在のオペラでも、音楽とドラマ性のバランスが重要であることに言及している。そして、「よい演出は音楽がよく聞こえてくるが、“ファーストの劫罰”では音楽がよく聞こえてこなかった」と結んでいる。

いずれにしても、その作品におけるストーリーと音楽の絶妙なバランスを得る手法については、送り手側の意図次第であるといえよう。

#### IV. 音楽作りの必然とドラマ性

ここで述べる創作オペレッタは、いわゆるシアター教育の範疇にあり(ドラマ教育とシアター教育の詳細は省略)、舞台発表をとる性格上、ストーリーのほか送り手と聞き手の関係を意識したさまざまな構成要素をもっている。なかでもストーリー運びは最も重要なものであり、そのドラマ性がことに重要になってくる。ここでいうドラマ性とは、単なる客観的なストーリー運びの過程ではなく、場を構成する観客と演者との交流のなかから生まれる、聞き手を惹きつける展開要素のことである。

そして、その場に醸し出される雰囲気さをさらに高めているのが音楽である。

ここで、筆者が教育として関わっている創作オペレッタ活動の全体的手順についての概要を記し、そのなかで特に音楽作りの必然について述べてみたい。

まず、対象者にマッチする発表テーマを設定し全体計画を立て、係り分担を決めストーリーや脚本を作成する。ストーリーの骨子を充分推敲したうえで登場人物のキャラクターを考える。文章で綴られたものを台詞に直し、その場の演者の心理や場面の状況などの説明文(ト書き)を作り、劇が演じられるような脚本を作る。そして、それを歌と台詞の部分に分け歌詞を考える。歌詞はその時の情景や心情に即した内容にする。

登場人物の感情が高まった時には必然的に歌になるが、歌と台詞とのバランスをとることも

大切である。このほか、テーマ音楽や情景描写の音楽、場面を繋げる間奏曲、背景音楽なども必要である。作曲にあたっては曲が歌詞にマッチしていること、歌手の音域や声質の確認、独唱か二重唱かなど、演者が歌い易く雰囲気合致したものが求められる。特に登場人物の特徴を捉えた曲作りを心がけることが大切である。また、伴奏や効果音の工夫も必要で、舞台の全体構成を確認したうえでバランスよく効果的に実施する必要がある。また、ストーリー進行にあわせた音楽の“間”のとり方も重要なポイントである。

さて、オペレッタはストーリーに沿い、舞台上で演技が繰り広げられるわけだが、演じる人の歌や台詞はそれなりの必然性がありそこに存在するので、相手との歌や動きや会話のやりとりが自然に流れることが大切である。例えば、怒った台詞をいう時にはその前に怒らせるような台詞の存在が必要である。また、笑う時にはその前に笑う条件が揃っていなければならない。このような会話ができてこそ、その場にリアル感が出てくる。会話だけではなく歌も同様である。お互いの演技が連鎖しているので、タイミングを一つ外しただけで“間”の悪い状況が作り出されてしまう。

音楽作りにおいては、状況設定が決められると音楽の必要な部分が必然的に生まれる。登場人物の歌などは、何もいなくても演者は観客にその心情がしっかり伝わるように表現する。また、その場に必要音や音楽も、そこに当然なくてはならないものとして作られ表現される。

このように、音楽が作られる状況は、その作品の全体構成のなかにおいて、特に演劇のもつドラマ性という必然に大きく支配されているといっても過言ではないだろう。

## V. 音楽作りの実際

ここで、音楽を専門としているわけではない看護専門学校における創作オペレッタ活動の音楽作りの実際を述べてみたい(注4)。

### 1. 看護専門学校における「音楽」授業の概要

看護専門学校は看護師を養成する学校であり、看護に関する優秀な人材の育成が求められている。カリキュラムのうち、筆者の担当する「音楽」は基礎分野にあたり、「人間と人間生活の理解」をその教育の目的にしている。そして、「創作活動をとおして豊かな表現力を養う」ことがそのねらいである。

授業実施時期は3年課程の2年生の後期であり、10月から11月末までの2カ月間に90分1コマの15回が設定されている。最後の2コマは発表会にあてられている。なお、1クラスの人数は36人である。

★「音楽」の授業では創作オペレッタ活動を中心に展開しているが、基礎分野の「人間と人間生活の理解」としては、次の5点を主なねらいとして実施している。

- ① 看護学生としての立場から題材選定することにより、一般社会への関心度が高まる。
- ② 音楽をとり入れた創作活動の実際を学び、意思を相手に伝達する表現方法を体験する。
- ③ とりあげたテーマの掘り下げにより、深い洞察力を育成する。

- ④ 音楽とその周辺部分に対する理解を深め、その技術や能力を高める。
- ⑤ 発表に関するさまざまな対応を学ぶ。

★「音楽」科目担当者としてのねらいは、主に次の5点である。

- ① 音楽と他分野との関わりをとおして、劇形態のなかでの音楽を意識する。
- ② 看護学生の立場から、自分たちの意図を伝達する対象者に、この活動がどのような影響を及ぼすか等について理解する。
- ③ 自己の音楽に対する関わり方について認識をもちその能力を使い、個々に応じたレベルアップを目指す。
- ④ 仲間との共同作業をとおしてグループ活動のよさを実感し、適切なコミュニケーション能力を伸長し、自他の認めあい等をとおして人間的な深まりを体験する。
- ⑤ 相手に自分たちの意思を伝達するための豊かな表現力を伸長する。

## 2. 音楽作りの実際

ここでは、具体的な創作オペレッタ活動のなかで、特に音楽作りに焦点をあてて述べてみたい。これは、1クラス36人を3グループに分け、それぞれの作品を作る活動である。

15回の授業のうち、音楽に関してはテーマ、ストーリーの流れの概略、配役仮決定等がほぼ原案として決まり始める3、4回目頃から、使われる音のイメージを探す姿がみられ始める。

なお、ここで使用される楽器はピアノではなく電子キーボードである。これは「音楽」の授業のために3台揃えてもらってある。この楽器はピアノのように場所もとらず移動も簡単なうえ、さまざまなリズムを選ぶことが可能であり、メロディーを弾けば自動的に伴奏がつくので、音楽の専門知識や演奏技術をあまり必要としなくても自分のイメージした音楽を作ることができるという利点がある。

看護専門学校の学生のなかには高い音楽的能力をもつ者もたまにいるが、特に専門知識がなくてもイメージを音に置き換えて演奏できるこの楽器は、彼らの意図した雰囲気を出すことが可能であるため、とても人気がある。

5回目には内容や脚本の詰めを行い、配役の決定に続き音楽のイメージ作りが具体的に始まる。

6回目位になると、メリハリのあるストーリー作り、それに至る内容の必然性や自然な台詞作りの確認、登場人物のキャラクターの詳細設定をするとともに、音楽のイメージ作りやキーボードで作曲や演奏をするための下準備として、楽器に触れその使用方法に慣れる活動が行われる。

7回目頃にはグループの進度に応じて脚本の詰めや曲作りが実際に始まる。そして、脚本のなかで音楽を使用すると効果的な部分をあげ、可能な箇所から歌詞作りやメロディー作りが開始される。さらに、部分的な動きの確認や台詞の妥当性について修正を加える。

8回目位になると全体的にも形がまとまってきて、役柄の心理状態の確認が行われるとともに、ある程度できあがってきた音楽と全体のバランスが討議され、効果的な動きの工夫もされ

る。

10回目位になると全体がほぼまとまってくるので、この段階では歌詞や曲・伴奏・音響効果等の工夫と、動きやダンスについても実際に動いて確認しながら進められていく。

11回目には、発表を意識しての細かい表現方法の指導を試みたが、この辺りになると「音楽」の授業のみならず、空き時間、ホーム・ルームの時間、放課後、昼休み等の時間も使い練習し、さまざまな工夫を重ねる姿がみられるという。一つの目標に向けてもう夢中！という若い集中力が発揮される時期でもある。自分たちで流れを理解したうえで歌ったり踊ったり喋ったりしてみると、不自然な部分があり、作品を完成させるために仲間たちとさまざまな試行錯誤を重ね、互いに協力し、目的に向かって知恵を絞り高まりあうという、創作活動本来のねらいが達成されつつある時期である。

12, 13回目では、発表会の段取りについての確認をし、14回目はゲネ・プロ、15回目が発表である。なお、学内での発表会のため、観客は1年生や教職員である。

### 3. 音楽作りにおける学生の様態

前述したように、看護専門学校の学生たちにとって「音楽」は一般教養としての位置づけであり、「人間と人間生活の理解」を主眼とした授業である。したがって、音楽の専門的な勉強や、ことさら高度な演奏技術を求められることはない。その観点からみると、彼らの音楽作りにはかなり興味深いものがある。

授業当初には、看護専門学校になぜ「音楽」の授業があるのだろうかという疑問をもつ者も多く、嫌だと思ふ人や嬉しいと思ふ人が交じりあって、不思議な雰囲気が始まる。しかも、いくら伝統になっているとはいえ、創作オペレッタってなに？という段階から始まるので、始めの2, 3回は引き気味の学生もみられるが、3, 4回目位になると徐々に興味を示してくる。そして、電子キーボードには大変興味を示し、既に自分で所有している者や、手元にはないが予めから興味をもっていたという者など、グループに1台の楽器の周りは、自分の知っている歌や曲にリズムやハーモニーをつけながら試みる学生たちに囲まれる。特に興味をもつのは多彩な音色とリズムであり、この時期には笑いが絶えない楽しい時間となっているようだ。

思いつくままのメロディーを弾き、多彩なリズムと音色を選び、筆者には使いこなせないようなメカとしての機能も使いこなし、ここでは逆に学生たちに教えてもらう時間でもある。これが切っ掛けになって、曲作りにチャレンジするのが面白いという風になっていく。こうなると、次々と自分たちのイメージした場面の音楽作りが加速し始める。

作り方は、キーボードの周りを何人かが囲み、歌詞にあうメロディーをあれこれ弾いてみて、ちょっと面白いと拍手と歓声が起これ、皆が納得するまでそれは継続される。授業時間内で終了しない場合は、ほかの空き時間や自宅での音楽作りが行われ、次時まで曲の原案が用意される。筆者は興味が湧くような和音やリズムを提示してみるが、それが採用されることもあるが、大体はそれをヒントにはするものの、自分たちの好みのままに曲が作られていく。それは楽典的には考えられないような曲であったり、摩訶不思議なメロディーであったりするが否定

はせずに認め、この時点では「凄い！ 素晴らしい！」と、よく褒める。

作曲などしたことがないという学生が初めて自分の力で形にした曲に、自分自身で感動して瞳を輝かせて歓声をあげる姿がそこにはある。それを楽譜に書いてもらい筆者がそれを弾くと、曲が違うという。とんでもない記譜がされているのである。創作オペレッタとして皆で歌を共有するためには、正確な記譜がないと困るため、そこは専門家の力を拝借する知恵が彼らに働き、筆者は彼らが歌うメロディーを五線紙に整理する役を受けもつことになる。

このようにして曲は完成するが、それらは驚くほど場面の雰囲気合致したものが多く、自由な曲作りを認めたからこそその作品になっていくのである。

音楽には素人ともいえる学生たちがこのような曲作りに惹きつけられるのは、いうまでもなく創作オペレッタのもつドラマ性に影響されているものといえよう。単に「音楽」のみの要素をもって授業を進めたならば、これ程のやる気と音楽的な高まりは得られなかったものと考えられる。それは、創作オペレッタを授業にとり入れる以前の筆者の授業と比較してみても頷けることである。自分たちの作ったオリジナルな作品に流れるドラマ性に影響され、彼らの音楽に対する感性の目覚めを引き起こしたものであるといえることができる。

それはまた、言語表現と非言語表現の融合が引き起こした現象でもあると考えることもできるだろう。

## VI. まとめ

今まで、創作オペレッタにおける音楽作りの必然とドラマ性について、言語表現と非言語表現の融合の面から、また、創作オペレッタの構成要素のうちストーリーと音楽との関係やその総合性についての観点から述べてきた。

いうまでもなく、創作オペレッタ活動を教育にとり入れるのは、観客である対象者に自分たちのメッセージを伝達することを主眼としており、その表現方法のさまざまな工夫による表現技術の伸長や、創作過程における人間的成長をねらいとしているためである。

創作オペレッタを構成する要素にはさまざまなものがあるが、なかでもストーリーと音楽が最も重要な要素といえることができる。

さらに、その作品のメッセージを相手に印象づけるためにはストーリー運びは最も重視され、そのドラマ性がことに重要な鍵となってくる。ここでいうドラマ性とは、IV. でも述べたが、単なる客観的なストーリー運びの過程ではなく、場を構成する観客と演者との交流のなかから生まれる、聞き手を惹きつける展開要素のことであり、音楽はその場を醸成する雰囲気をさらに高め印象づけるものとして機能する存在となっている。

今回記述した看護専門学校での「音楽」授業では、創作オペレッタの音楽作りにおいては、その作品に流れるドラマ性に大きく支配されていることが分かった。

すなわち、ストーリー運びとドラマ的展開により場が醸成されると、必然的にその場に合致した音や音楽・歌などが生まれてくることが確認できたことである。これは、音楽を専門としていない学校の一般教育の結果としてだけではなく、筆者の関わってきたほかの学校の活動に



においても同様であることが経験的に分かっている（注5）。

創作オペレッタの活動は総合的な活動であり、さまざまな要素を包括できる可能性を秘めているが、経験的に分かっているというだけではなく、今回のように一つひとつの要素について実践・分析・考察を加えることにより、今後さらにこの活動が具体的で分かり易いものになっていくものと考えられる。

加えて、言語表現と非言語表現の融合による表現様式に共通する非言語表現の因子である、流れ・動き・広がりキーワードとした分析等が行われれば、教育において有益な新たな視点が生じてくることも期待できるだろう。

#### 《 注 》

- (注1) 西澤昭男 非言語表現の原理と教育的意義 日本教材学会 2005 P5  
(注2) 創作オペレッタの教育的意義については、上田女子短期大学紀要第7号, 9号, 14号～20号, 22号～24号の拙稿を参照されたい。  
(注3) 上田女子短期大学紀要第20号を参照されたい。  
(注4) ここでは、上田女子短期大学紀要第27号(2004)で述べた、看護専門学校における創作オペレッタ実践の教育的効果についての拙稿から、音楽作りの部分のみをとり出し概要としてまとめたものである。  
(注5) 筆者が教えている幼児教育学科の学生、歯科衛生士学科の学生、保健師学科の学生たちの実践から分かったことである。

#### 《 参考文献 》

- 拙著：音楽表現の世界 樹芸書房 1994  
西澤昭男・神原陸男・内山澄孝・北村恵子・渡辺亜紀人：音楽教育における「不易と流行」 教育芸術社 2002  
拙稿：創作オペレッタの教材化 教材学研究第14巻 日本教材学会 2003  
西澤昭男・北村恵子ほか：表現力の育成と教材開発 日本教材学会 2005